最高の笑顔、最高の一枚

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最高の笑顔、最高の一枚

【Ｎコード】
Ｎ１１０８Ｚ

【作者名】
無銘

【あらすじ】
国際条約であらゆる国や企業により開発が禁止されたＶＴシステム…その裏にある一人の少女と一人のカメラマンの出会いがあった。果たして二人は何を見るのだろうか…

原作崩壊、キャラ崩壊、時系列矛盾、独自設定・解釈、その他諸々の地雷要素が含まれております。

それと非常に冗長です。

※本作品に限らず同じ題材の拙著は皆同じ世界観・設定という前提で書いています。

（前書き）

本作品は原作レイプを通り越してゲリラ諸共傭兵部隊を始末するくらいの暴挙を犯しております。読まれる際には十分ご注意願います。

世界唯一のＩＳ操縦者養成機関『ＩＳ学園』。

ＩＳが原則女性しか操縦出来ない関係上、生徒も教師も皆女性の『女の園』だ。

もっとも、学園の用務員轡木十蔵…実際は各国政府や軍との折衝や実務関係を取り仕切っているが…がいるし、最近では世界最初の男性ＩＳ操縦者『織斑一夏』もいるので男性も皆無ではないが。

そんな『女の園』は教師・生徒共にそれぞれ違うタイプの美女・美少女揃いと名高く、ＩＳ学園唯一の男子生徒織斑一夏を羨み、妬む者もいると聞く。

そして美女揃いの教師陣でも織斑一夏が所属する１年１組の担任と副担任は特に人気がある。

担任の名は織斑千冬。織斑一夏の実姉であり、現役時代世界最初のＩＳ操縦者にして、第１回『モンド・グロッソ』総合優勝者『ブリュンヒルデ』の称号を持つ世界最強のＩＳ操縦者として知られていた。

強さのみならずその美貌から多くのＩＳ操縦者が憧れ、敬意の対象となっているが、同時に雰囲気の鋭さや自他共に厳しい性格から畏怖され、避けられている。

実際副担任の存在が無かったら生徒の何人かは精神的ストレスで脱落していたかも知れない。実弟の織斑一夏は大丈夫だろうが。

そんな担任を補う形になっているのが副担任の山田真耶である。
彼女は千冬とは対照的に穏やかな雰囲気を持ち、性格も優しく天然ボケで少々ドジだ。
彼女は生徒からあだ名を付けられるなど生徒達からは親しまれている。
特にその優しげな笑顔には皆心洗われ、癒されると専らの評判だ。
ただ腕の方は元日本代表候補生だった事もありかなりのものだが。
そんな彼女が過去に現在国際条約で禁止されている『ＶＴシステム』と関わりがあった事は知られていない。
これはそんな彼女と、彼女を取材したとあるカメラマンの話―
内気な自分が、ドジな自分が、どこかボケている自分が、そして自信を持てない自分が嫌いだった。

ＩＳ学園内の食堂で１年生の制服を着た少女達が談笑している。

「けど人は見かけによらないとはよく言ったものよね…また負けちゃった」

「たまたまだよ…私だって驚いたし」

「その『たまたま』が何回続いてると思ってるのよ、真耶？」

少女達の中の一人は眼鏡をかけた少女…山田真耶に水を向ける。

「大体自分を過小評価し過ぎなのよ…見た目も成績よも実技も性格もよくて家事も出来てスタイルだっていいんだから」

「そうそう、何で男が寄りつかないのか不思議なくらいよ」

「私、そんな大した事ないよ…」

そう言って真耶は困ったように笑う。

少女達の発言は紛れもない事実だ。

真耶はＩＳ適性はＣと低めだが、入学後は腕を上げ、クラス対抗戦優勝を皮切りに順調に勝ち続け、今では同学年相手には負けなし、上級生も『食える』実力の持ち主と目されている。

しかも真耶は座学も優秀で、下手な３年生より知識はあるかも知れない。

更に性格も温厚かつ謙虚で、彼女の敵を探せという方が難しい。
そんな彼女もやはり人の子、引っ込み思案かつ天然ボケでドジな所があり、そこを含めて愛されている。

（大した事ないよ…『織斑千冬』さんに比べたら）

しかし真耶は自分に自信を持てなかった。

真耶の父は国防軍ＩＳ運用部管理官補佐…ＩＳ操縦者直属の上司『管理官』の副官を務めている。

そして彼女の父親が補佐している管理官の担当ＩＳ操縦者が織斑千冬である。

その縁で真耶は千冬と何度か会った事があり、第1回モンド・グロッソも全部会場で見た。

そして真耶は織斑千冬に憧れ、心を奪われた。

千冬は専用ＩＳ『暮桜』を駆り、刀一本で次々と各国代表機を打ち負かした。特に決勝戦で重装甲高火力を誇るイギリス代表を一刀の下に斬り捨てた時の千冬の姿は、真耶の瞳に焼き付いている。

しかも千冬はただ強いだけではなく、美しかった。動きが全て綺麗で、凛々しくて、美しかった。

だから真耶は千冬に憧れを抱き、千冬のようになりたいと思い、勉強してきた。

そしてＩＳ学園へ入学出来た時は本当に喜んだ。

だが、同時に自分が千冬に比べてあまりにちっぽけだと気付かされた。

ＩＳ適性からしてＳはあるだろう千冬に対して、自分はＣだった。

確かに同学年相手なら負けなしだったが、各国の代表を刀一本で斬り伏せた千冬に対して、自分は同じ機体を使っている上級生にはあまり勝てない。

知識だって多少自信はあったが、開発者の篠ノ之束に次いでＩＳに詳しい千冬とは比べ物にならない。

性格も昔から内気でドジを踏む自分と違って、千冬は厳格ながらしっかりしており、

自分の意見も言える強さがある。何より織斑千冬の美しさに自分は比ぶべくもない。

そんな憧れて、心惹かれた織斑千冬と比べたら自分などちっぽけだ。

同時に真耶はそんな傲慢な自信の無い自分自身を嫌っていた。

「そんな大した事ない真耶に負け続けてる私達の立場はどうなるのよ！？この、この！」

「ちょ、ちょっと苦しいよ…」

ふざけて真耶の頭に軽くヘッドロックを掛ける友人達を見ながら、真耶は内心自分の短所に溜め息をついた。

「わ、私がだ、代表候補生に！？」

「ああ、我々としては君に是非とも日本代表候補生として頑張って貰いたいと思っている」

山田真耶が学園長室に呼ばれると、そこには国防軍の制服を着た男が居た。

父親の上官…織斑千冬担当管理官でもある岩田大佐だ。

真耶の父親とは学園の用務員の轡木十蔵とともに、真耶が産まれる前…怪人だけの世界を創ろうとしていた暗黒結社『ゴルゴム』との戦い以来の戦友だと聞いた事がある。

岩田とは家族ぐるみの付き合いで、真耶もよく可愛がってもらっている。

岩田はＩＳの登場以来国防軍でＩＳ運用に携わっており、ＩＳ学園創設にも関与しているらしい。

今では世界最強のＩＳ操縦者『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬の管理官を務める傍ら、代表候補生のスカウトも担当している。

「…私が…代表候補生…なんて…」

「君の成績は見せて貰った。君はそれに相応しい成績を残している。自信を持ちたまえ。あの織斑千冬も君に期待しているのだから」

「お、織斑千冬さんが！？」

真耶は思わず聞き返す。

それが事実なら…もし本当に期待してくれているのなら…

「では、もう一度言わせて貰う。我々国防軍は君、山田真耶を日本の代表候補生としてスカウトとしたい。君の返答を聞かせて貰いたい」

「…やらせて…頂きます！」

山田真耶は岩田に力強く肯定の返事を返した。

ＩＳ学園の前に1台のバイクが停車する。

男はバイクから降りるとヘルメットを脱ぎ、カメラを取り出す。

「さて、それじゃ『ブリュンヒルデ』も注目の期待の新人、『山田真耶』を取材といきますか」

そう言って男…一文字隼人はＩＳ学園の正面ゲートをくぐり、学園内へ入る。

隼人がＩＳ学園を訪れたのは、最近日本の代表候補生となった学園の生徒『山田真耶』を取材する為である。

実は真耶のようにＩＳ学園の生徒が在学中に各国政府や軍にスカウトされ代表候補生となるケースは珍しい。

大抵代表候補生はＩＳ適性がＡは必要とされる事が多い。

そんな優秀な人材は大抵ＩＳ学園入学前に政府や軍が目を付け代表候補生としている。

その為ＩＳ学園にいる代表候補生も殆どが入学前に代表候補生となっている。

真耶は適性検査ではＣとそれよりランクが落ちる。だから政府や国防軍はノーマークであった。

だが彼女は入学後に実力を伸ばし、今は学年随一の実力者である。

そこで国防軍は急遽真耶をスカウトして代表候補生とした。
隼人が真耶に興味を持ったのはそれに加えて、一度取材した『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬から真耶の話を聞いていた為だ。
そこで隼人は了承を得た上で、ＩＳ学園に真耶の取材に訪れた。
ＩＳ学園の校舎に入ると係員らしき人物の案内で校舎内を歩いていく。
途中視線を向ける生徒達に会釈してみせたりしながら、応接室へと案内される。
ノックして入ると眼鏡をかけた少女が椅子に座っていた。
隼人も少女と向き合い椅子に座ると挨拶した上で尋ねる。
「ご確認しますが、山田真耶さんですよね？」
「…はい」
少女…真耶は頷く。
「では改めて…今回取材させて頂くフリーのカメラマンをしている一文字隼人です。今日はお忙しい中時間を取らせてしまって申し訳ありません」
「い、いえ…私、代表候補生と言ってもまだなったばかりですし…

専用機もありませんから」

真耶は隼人の言葉に慌てて首を振る。

「そんな謙遜なさらなくても…後そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ？取材って言ってもそんな大それたものじゃありませんから、楽にして下さい」

隼人は人懐っこい笑顔で緊張した面持ちの真耶に言う。

「あ、す、すいません…」

「それと、謝らなくても大丈夫ですからね？じゃあ早速ですが質問に入らせてもらってよろしいですか？」

「は、はい…お願いします」

隼人は緊張で固まる真耶に苦笑しながらも質問を始める。

内容は家族・友人の事、趣味の事、学園生活でのちょっとした事など一見ごく他愛もない…しかし仮にも代表候補生の取材とは到底思えない質問ばかりだ。

始めは緊張していた真耶だが、隼人の笑顔や軽妙な語り口もあって、今では緊張がだいぶ解れている。

「それで、結局その猫は結局どうしたんです？」

「…友達にあげちゃいました。寮では飼えませんし、その友達は猫が大好きだったので。今でも元気にその友達の家で暮らしてるらし

いです」

そして今は真耶がつい最近寮の前で捨て猫を拾い、寮で飼おうとしたら怒られた為学園近くに住む藍越学園に通う友人に猫をあげた話を隼人は聞いていた。

ふと真耶が思い出したように隼人に尋ねる。

「あの、一文字さんは…何の取材でここにいらしたんですか？」

真耶の疑問に隼人は苦笑し答える。

「…雑談で取材終わらす所だった…失敬、代表候補生山田真耶さんの取材に来たんでしたね」

「こちらこそすいません…あともう一つお聞きしたいんですけど…」

「何でしょう？」

「どうして…私なんか取材しようと思ったんですか？」

真耶は隼人に続けて質問する。

「経歴に興味を持ったのと『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬から名前を伺っていたから、って所ですかね」

「…織斑千冬さんから、ですか？」

「ええ、一度取材した時に」

「あの織斑千冬さんが…あんなに強くて、綺麗で、凛々しくて、格好いい人が私の事を…？」

（綺麗で、凛々しくて、格好いい、ねえ…）

隼人は取材した事がある織斑千冬を思い浮かべる。

隼人はモンド・グロッソから暫く後に千冬へ取材を申し込んだ。

モンド・グロッソ優勝直後は取材が殺到していた千冬だが、今は落ち着いた事もあってか、あっさり取材は許可された。

隼人が千冬へ抱いた第一印象は真耶同様『雰囲気と目付きが鋭いスーツ姿が似合いそうな美人』であった。

しかし取材後に隼人が抱いた印象は『ブラコン』、『メシマズ』、『ズボラ』、そして『ブラコン』である。特に隼人にとってブラコンは大事な事である。

実際予定を大幅に超過した取材時間の大半は、千冬の弟自慢と溺愛話であった。

そんな事になったのは子供好きの隼人が千冬の弟話に食い付いたのも原因だが。

そして取材もその溺愛っぷりから将来弟に彼女が出来ないと隼人が心配したり、弟の歳不相応の料理や家事能力の高さから千冬がいかに料理や家事がダメか隼人が悟り、呆れるなどしていた。

隼人は目的を果たせたので大した問題ではなかったが。

そんな事はおくびにも出さず隼人は頷く。

「ええ、何度か貴女とお会いした事があるという事と、期待していると聞いています」

「で、でも…あの人に比べたら…」

「『最高とは常に自分の隣にある』」

「…えっ？」

「俺の先生が俺に言ってくれた言葉です」

自信なさげに言葉を続ける真耶に隼人が笑って言う。

「誰かに憧れ、目標にするのはいい事だ。けど何でも自分とその誰かを比べてはいけない…そんな意味です」

「貴女と織斑千冬とでは何もかも違うんです。それは当たり前の事なんです」

「だから、貴女が彼女に劣っている部分があっても恥じる事はありません」

「逆に貴女が織斑千冬より優れている部分は必ずあります。彼女も完全無欠じゃありませんしね」

「だからもっと自分に自信を持って下さい。織斑千冬には織斑千冬の人に誇れる『最高』の何かがあるように、貴女には貴女の人に誇

れる『最高』の何かがあるんですから」

「そしてその『最高』を見つけ出して、磨き上げられるのも貴女だけです。他の誰かはそれを手伝う事しか出来ませんから」

「その為には貴女が自信を持つ事が大切なんです。きっと織斑千冬もそう望んでいると思いますよ？」

隼人は言葉を切る。時計を見れば取材終了時刻だ。

「…言い忘れてましたけど、貴女を取材したいと思ったのはもう一つ理由があるんです」

「一人の人間としての貴女の素顔を、表情を、そして笑顔を撮りたいと思ったんです」

「私の…笑顔…ですか…？」

「ええ。と言っても今回は撮れませんでしたけど。取材も今日だけって約束ですし…そうだ」

隼人はメモ帳にペンを走らせ真耶に渡す。

「もし良ければこれからも貴女を『取材』させてくれませんか？勿論俺は学園に入れませんので貴女の方から出向いてもらう必要がありますが…」

「俺は当分『立花レーシング』に居るので、気が向いたら遠慮なく来て下さい。いつでも歓迎しますよ」

「それじゃあ、今日はありがとうございました」

そして隼人は真耶に礼を述べた後に別れの挨拶を済ませ、部屋を出た。

「旨い！やっぱりおやっさんのコーヒーは最高だ！」

山田真耶への取材を終えた翌日の夕方、一文字隼人はＩＳ学園近くの街にあるバイク店『立花レーシング』の店内で『おやっさん』こと立花藤兵衛が入れたコーヒーを飲んでいた。

「けどいきなりなのは毎度の事とはいえ、たまには連絡入れろよなあ…」

バイクの整備をしていた男…立花藤兵衛はそんな隼人に冗談混じりにぼやく。

二人の付き合いは長いが、顔を出す時は大抵何かしらの連絡を必ず入れる本郷猛とは対照的に、隼人はいつも唐突に現れる。

今回も隼人はいきなり顔を出して藤兵衛を驚かせたが、同時に再会と無事を大いに喜び、暫く店に滞在させている。

「ところで隼人、山田真耶って子、来ると思うか？」

「さあ、彼女次第だよ。俺は勝手に待ってるけどね」

整備を終え立ち上がりタオルで汗を拭う藤兵衛の質問に隼人が答える。

メモは渡したが来ない公算が大きい。

それでも隼人は待っている。もし来た時の為にも待ち続けている。

藤兵衛は何も言わずに工具をしまう。

「あ、あの…」

そこにＩＳ学園の制服に眼鏡を掛けた少女が藤兵衛に声をかける。

隼人は椅子から立ち上がり、笑顔で少女に告げる。

「ご協力ありがとうございます。座りながらゆっくり話を聞かせてもらえませんか？山田真耶さん」

そして少女…山田真耶は藤兵衛に一礼し、店の中に入っていった。

「あの、一文字さん、毎回思うんですけど…立花さんのコーヒーって妙に美味しくないですか？」

「おやっさんは昔は喫茶店もやってましたから」

「ああ、だから今もコーヒーの味には少し自信があるんだ」

『立花レーシング』の店内で立花藤兵衛が入れたコーヒーを飲みながら山田真耶は一文字隼人からの『取材』を受けていた。

あれ以来真耶は暇さえあれば隼人がいる『立花レーシング』に顔を出し、藤兵衛を交えて色々話すようになった。

話の内容は真耶の最近あった出来事や学園での話、たまにＩＳ操縦者として体験した事や思う事など雑談に近い。

そして隼人も思い出話や自分がカメラマンとして経験した話をするようになっている。

「…それで真耶ちゃんは織斑千冬って人を尊敬してるのか…」

「はい、あの姿がずっと目に焼き付いてて…」

「まあ、その気持ちは分かりますよ。…ブラコンと知らなければ」

「一文字さん、何か言いました？」

「いえ、何も？」

そして今は真耶の憧れの人織斑千冬について三人は話していた。

千冬の事を目を輝かせながら話す真耶に隼人と藤兵衛は目を細め相槌を打ち、聞き役に回っている。

ふと真耶は呟く。

「…私が、そんな人みたいになろうだなんて、おこがましいですよね…」

「真耶さん、そんな事は…」

「分かってます」

何か言いかける隼人を真耶が遮る。

「それがダメなんだって事も、そんな事考えて自信無くしてる私が傲慢なんだって事も、分かってます…」

「私は内気な自分も、ドジな自分も、ちょっとズレた自分も嫌いです」

「でも勝手に千冬さんと自分を比べて自信無くしてる自分が、一番嫌いです…」

「…そんな私が…自信なんて…」

「…持てますよ」

真耶の呟きを今度は隼人が遮る。隼人は続ける。

「俺も昔そう思ってた時期がありましたから、言えます。貴女も絶対に自信が持てます」

「一文字さんが…私みたいに…？」

その言葉に意外そうな表情を真耶は浮かべる。

「ええ。俺もロンドン美術大学を卒業してすぐに『白鳥八郎』先生に弟子入りして暫くの間は俺も自分に…自分の撮った写真に自信を持てませんでした」

「白鳥八郎って…あの有名な？」

「そう言えば隼人、前にそんな事言ってたな」

白鳥八郎…かつてピューリッツァー賞を始めとする様々な賞を受賞してきた凄腕のカメラマン。

その写真は内戦地の現状から道端の花まで多岐に渡り、多くのカメラマンが憧れ、尊敬したカメラマン達にとっての『ブリュンヒルデ』的存在である。

そして真耶や藤兵衛もその名を知るくらいには有名な人物である。

隼人は頷きながら続ける。

「俺がカメラマンになろうと思ったのも子どもの頃に白鳥先生の写真を見て先生に憧れ、心惹かれたからなんです。だからロンドン美術大学でもずっと写真を勉強してきました」

「こう見えて首席だったんですよ？そして大学を卒業した後は白鳥先生の弟子にしてもらえたんです」

「先生の弟子になれて嬉しかった。舞い上がってました…でも同時に俺は先生に比べてあまりにちっぽけだと気付かされました」

「同じ物を同じカメラで撮っている筈なのに俺と先生では、アングルもシャッターを切るタイミングも…全て違ってました。写真の出来が全然違ってたんです」

「なまじ優秀だっただけに完全に自信を無くしちゃって…一時はカメラマン辞めようかと思いました」

「でも、ある日先生が俺に聞いてきたんです…『君が本当に撮りたいと思っているのは何か』、そして『1週間後に君が本当に撮りたいと思った物を撮って私に見せなさい』ってね」

「最初は悩みました。先生への憧れと比較で精一杯でしたから」

「でも5日くらい経って公園で子供達が笑いながら遊んでるのを見て気付いたんです。俺は笑顔を…誰かが自然に、心から笑っている姿を本当に撮りたいんだ、と」

「そして俺はカメラ片手に街中に出て笑っている所を写真に収め続けました。沢山撮って、より良いものを、より良いアングルで…最高の写真を撮る為に」

「そして約束の日に撮った写真を先生に見せました。すると先生は『誰かの笑顔を撮ることにかけては君には勝てない』と言って、似たような構図で先生が撮影した写真を見せてくれたんです」

「…確かに俺の方が上でした。少なくとも俺と先生はそう思いました。そして先生は続けて言いました」

「『最高とは常に自分の隣にある』、ですか？」

真耶が隼人に言われた事を思い出し、言う。

「ええ。そして君と私とでは性格も撮りたいものも違う。だから私は君に基本は教えられても君が撮りたいものを撮りたいように撮る事…『最高』の撮り方を教える事は出来ない」

「だから『最高』の撮り方は君が君自身の感覚や考えを信じて、自信を持って君自身の手で探し出すしかない。私は手伝う事しか出来ない、ってね」

「それを聞いて俺も吹っ切れました。今では俺は俺の写真に自信を持ててます。だって本当に撮りたい物を、俺が見つけた俺だけの『最高』の撮り方で撮ってるんですから」

「だから真耶さん、貴女だって『最高』は見つけられます。貴女には貴女だけのＩＳに乗る理由が、やりたい事がきっとあります」

「だから、自信を持って下さい。そうすればきっと貴女にしか見えないものが、貴女にしか出来ない事が、貴女にしかない何かが絶対に見つかりますから」

「で、でも私…」

「…憧れでいいんですよ、俺もそうだったんですから。だからこれからじっくり考えて見つければいいですよ。俺で良ければ手伝いますから」

そう言って隼人は笑いながら続ける。

「それと、俺から見て真耶さんが織斑千冬より確実に上なものは一つありますよ？」

「わ、私が…？」

「笑顔、ですよ」

「…笑顔が…？」

「ええ、優しくて、温かくて…見る人みんなを癒して、幸せにしてくれる貴女だけの『最高』の笑顔だ」

「そんな…私は…」

「俺が保証しますよ。笑顔を沢山見てきた俺が」

「それと俺も真耶ちゃんの笑顔がそうだって保証するよ」

藤兵衛も隼人と同じように真耶に微笑む。

「…私、やっぱり自分の事は信じられません」

「…でも、お二人を…お二人の言う事を私は信じます」

「…ありがとうございます！」

そう言って真耶は心から…『最高』の笑みを浮かべて二人に礼を言う。

それとほぼ同時にカシャ、とシャッターを切る音が聞こえる。

「やっと撮れた…山田真耶が心から笑った『最高』の笑顔が。そしてそれを撮った『最高』の一枚が」

隼人はカメラを構えていた。そして自身も笑顔を浮かべている。

真耶は笑いながら隼人に続ける。

「あの、一文字さんにお願いがあるんですけど…いいですか？」

「何なりと。最高の一枚を撮らせて貰いましたからね」

「その、『さん』付けとか敬語とか止めてもらえませんか？なんか…むず痒いというか…似合わないというか…」

「…分かったよ、真耶ちゃん。これからは気を付けるよ」

隼人も笑い返して頷く。

「けど真耶ちゃんも割と毒舌だね…本人の前で似合わないとか言うのはないだろ？」

「ご、ごめんなさい！そんなつもりで言ったんじゃ…」

「冗談だよ。気にしちゃいないさ」

真耶をからないながらも、一文字隼人は山田真耶を微笑ましく思っていた。

「そっちはチェック終わった？こっちは今調整してるから少し待ってて」

「2機共に異常無し。後は『赤鉄（あかがね）』だけです」

富士山麓にある『富士演習場』のＩＳ用アリーナ。

ここのＩＳ格納デッキ内で3機のＩＳが整備員達によりチェックが行われていた。

現在此処にあるＩＳは日本国防軍とドイツ軍のＩＳ模擬戦で使用さ

れる機体である。
３機はいずれも日本側の機体であり、３機共日本の代表候補生が乗る機体である。
特に赤い鎧武者のような、鬼のような機体『赤鉄』は『専用機』である。
「こっちも調整とチェックは完了、っと。真耶、ちょっとこっちに来てくれない？」
「は、はい！」
整備員のリーダーらしき女性がＩＳスーツを着てデッキ内に待機していた少女…山田真耶へと声をかける。
「言われた通りハイパーセンサー調整したからちょっと試してみて」
「分かりました」
そう言って真耶はＩＳ『赤鉄』を装着する。
この『赤鉄』は山田真耶の専用機として開発された機体である。
一文字隼人に笑顔を撮られてから数日後に真耶は専用機の受領と、今回の模擬戦への参加を国防軍から命じられた。
最初は先輩を差し置いて出来ないと尻込みしていたが、その先輩達の後押しで受領する事になった。

「…はい。これで大丈夫だと思います。ありがとうございます、ひとみ先生」

「佐原班長、でしょ？」

そう言って整備班長の女…佐原ひとみは持っていた整備マニュアルで『赤鉄』から降りてきた真耶の頭を軽く小突く。

佐原ひとみはＩＳ学園整備科の教師であると同時に、国防軍のＩＳ整備斑長も兼務している。

本来『外部不干渉』を謳うＩＳ学園の教師が軍属なのは問題だが、操縦者以上に整備士の人材不足が深刻である為、整備科に限り一時的措置として認められている。

ＩＳとは開発されてまだ数年しか経っていない全く新しい兵器だ。しかもＩＳコアを始め未知の部分も多い。

それをしっかり整備出来る人間は開発者の篠ノ之束を入れてもまだまだ少ない。マニュアルも、人員育成ノウハウも手探りの状態だ。

佐原ひとみは数少ない『ＩＳをきちんといじれる』整備士だ。

現在ではＩＳ学園で教鞭を執る傍ら日本代表や代表候補生が模擬戦などをする度に呼ばれてる。

特に第１回モンド・グロッソでは織斑千冬のＩＳ『暮桜』の整備を担当しており、今でも『暮桜』の現地での整備や修理は現場に出てこない束の代わりにひとみがこなしており、千冬からもその腕前を信頼されている。

「相変わらず元気そうね、ひとみちゃん？」

「驚いた…真耶ちゃんの陣中見舞いに来てみたら顔見知りがいるとはね」

「玲子さん！お久しぶりです！」

「一文字さん！？どうしてここに！？」

そこにひとみと真耶がそれぞれ知る二人のカメラマンが入ってくる。

ひとみに声をかけたカメラマンは白鳥玲子。白鳥八郎の実娘であり彼の最後の弟子であり、父親と同じくカメラマンをしている。

現在では主にＩＳ関連の取材をしており、雑誌『インフィニット・ストライプス』など数多くのＩＳ誌に引っ張りだこの売れっ子カメラマンである。

佐原ひとみとは最後の悪の組織『クライシス帝国』の出現前後からの古い付き合いだ。

そしてもう一人のカメラマンは一文字隼人。白鳥八郎の最初の弟子であり、玲子の兄弟子に当たる。

「あ、あの…お二人はどうして此処に…？」

真耶が二人のカメラマンに尋ねる。

「ちょっと取材がてら応援しにきたのよ。勿論許可は取ってあるわ。

あ、申し遅れたけど私は白鳥玲子。噂はかねがね聞いているわ、山田真耶さん」

玲子は真耶の質問に答えると自己紹介をする。

「そういう事さ、真耶ちゃん。おやっさんは来れなかったけど店から応援してるってさ」

そう言って隼人も真耶に笑って付け加える。

「あ、あの…ありがとうございます」

「いや、礼はいいさ。その代わり試合が終わったらまた君の笑顔を撮らせてくれないかな？」

「…喜んで」

隼人と真耶が談笑している横でひとみと玲子も再会を喜び合っていた。

「ひとみちゃんも随分見ない内に大きくなったわね」

「玲子さんは全然変わらないんですね」

「お世辞を言っても何も出ないわよ？…この機体が彼女の専用機？」

「ええ、『赤鉄』と言って色々と新技術を投入してある…らしいです」

「らしい？」

「ええ、内部装甲にナノマシンを使用しているのは分かるんですが…マニュアルにも載っていない謎のシステムが搭載されている形跡があるんです」

「そんなの使って大丈夫なの？」

「一応封印処置が施されているみたいですし、何より命令ですから…」

「ひとみちゃんも大変ね…ってそろそろ時間ね。終わったら改めて取材させてもらうわ。それじゃ行きましょ、隼人さん」

「ああ。真耶ちゃん、観覧席で応援してるから緊張し過ぎない程度に頑張ってね？」

「ありがとうございます、一文字さん」

「分かりました玲子さん。また後で」

そして笑顔で二人のカメラマンを見送ると、ひとみは真耶に向き直る。

「さ、時間だから準備しましょ？」

アリーナ観覧席の一つに、織斑千冬は腰掛けていた。

千冬がアリーナに来ているのは日本国防軍とドイツ軍の模擬戦に出る山田真耶を見る為だ。

千冬が真耶と初めて会ったのはモンド・グロッソの少し前の事だ。

内気だが優しく穏やかな笑顔で自分に話し掛けるその姿を、千冬は弟の一夏に重ね合わせてどこか微笑ましく思っていた。

同時に自分の管理官である岩田大佐から真耶のＩＳ学園の成績を見せて貰った時は舌を巻いた。

飲み込みが尋常ではなく早い。入学以前はそれほどＩＳに触れる機会が無かったにも関わらず、現時点では同学年に敵がいないまでに熟達しているのだ。

はっきり言ってＩＳ適性とは何だったのか疑いたくなるくらいだ。

もっとも、千冬自身はあまり当てにしていないが。

そんな真耶に千冬は期待していた。…自分の後に日本代表になれるだけの器であると。

だからこそ休暇ついでに寄ってみた。

もう一つの理由としては仕事が忙しく見に行けない真耶の実父である管理官補佐の代わりだ。

山田補佐官は常に真面目かつ冷静で、仕事中に私情を挟む事はしないので山田補佐官から直接千冬が頼まれた訳ではない。
ただその古くからの戦友で実直だが情に脆く顔に出やすい岩田管理官を見て察しただけだ。

「隣、いいかしら？織斑千冬さん」

「…玲子さん」

「俺もいるぜ？『ブリュンヒルデ』さん」

「その呼び方は止めて貰えませんか？一文字さん」

そこに白鳥玲子と一文字隼人が声をかける。

白鳥玲子は仕事柄よく千冬に取材してくるのである程度気心の知れた仲だ。

一方、一文字隼人の方は一回しか取材を受けていないがかなり長く話し込んでいたので千冬も覚えている。

特に「弟は姉のもの」と主張する千冬と「弟の人生は弟自身のもの」と唱える隼人との間には相容れない部分がある。

とはいえそれ以外の部分では気が合う点もあるので千冬としても隼人に対して特に悪感情は抱いていない。

むしろ子供好きで一夏の話を積極的に聞く辺り悪い人間には思えず、嫌いになれなかった。

「千冬さんも山田真耶さんの応援に？」

「ええ。お二人もですか？」

「私は取材のついでに、ってところかしら」

「俺は応援ついでに取材がしたくてね」

そう言って二人は千冬の両脇に座る。

「そろそろかしら？」

「…入場してきましたよ」

「それじゃ、彼女の健闘を祈るとしますか」

そして三人はアリーナへと入ってきた６機のＩＳへ視線を向けた。

「緊張しなくていいわよ？真耶。相手はあの『黒ウサギ隊』…『シ

ュバルツェ・ハーゼ』なんだから負けて当然と思って、胸を借りるつもりで思い切りやりなさい」

「そうそう。それにいざとなったら私たちがフォローするから」

『赤鉄』を身に纏った山田真耶に対して量産機『刃鉄(はがね)』を装着した二人の日本代表候補生が話し掛ける。

相手はドイツ軍が誇る最精鋭ＩＳ配備特殊部隊『シュバルツェ・ハーゼ』…通称『黒ウサギ隊』所属の代表候補生だ。

特に参加している『シュバルツェ・ハーゼ』副隊長のハインリヒはドイツ代表で同隊隊長を務めるシュヴェスターに次ぐ実力者だ。

ドイツは『アラスカ条約』により保有可能ＩＳが１０機とやや少ない数が定められている為か、ＩＳ操縦者は少数精鋭主義である。特に３機も配備された『シュバルツェ・ハーゼ』はその傾向が強い。

シュヴェスターは第１回モンド・グロッソ準決勝で織斑千冬に敗れこそしたが、刀一本で相手を瞬殺してきた千冬に逆に一太刀浴びせるなど、第１回大会一の名勝負と挙げられる程の激戦を繰り広げた強者だ。

そんな第２次世界大戦中の同国空軍を彷彿とさせる変態…もとい精鋭を相手にするのだ。

経験のある他の二人はともかく、『実戦』の機会はＩＳ学園で行われる各種トーナメントしかない真耶に勝てというのは無理な話だ。

「あ…ありがとうございます」

しかし真耶の緊張は中々ほぐれない。

ふと視界に観覧席の様子が映る。

その観覧席の前の方に先程自分が会った一文字隼人、白鳥怜子、そして…

（織斑…千冬さん！？）

かつて自分が心惹かれ、今でも目標としている『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬が並んで座っていた。

隼人はこちらに手を振っている。怜子はこちらに声援を送っている。千冬もこちらに視線を向けている。

（…負けられない！）

応援してくれている一文字さんや白鳥さん、立花さんの為にも…何より見ていてくれている織斑千冬さんの為にも…負けられない。

闘志を胸に山田真耶は合図と同時に動き出した。

「やるなあ、真耶ちゃん」

「とても最近代表候補生になったばかりとは思えないわ」

「しかし、やはり相手が悪すぎる…ハインリヒが彼女を重点的に狙っている」

一文字隼人と白鳥玲子、それに織斑千冬は開始して暫く経った模擬戦を見ながらめいめい呟く。

日本側とドイツ側との模擬戦は一進一退の攻防を繰り返していた。日本側が攻めに回るかと思えばドイツ側が反撃に転じ、ドイツ側が決めようとすれば日本側が痛打を与える。その繰り返しだ。

特に山田真耶の奮闘ぶりに目がいく。スラスターを駆使して弾幕をかい潜りブレードを切り払う。その姿は普段から想像もつかない程の気迫が乗っている。

だが経験の差ばかりは覆せない。現に真耶はハインリヒの集中攻撃を受け押される一方だ。他の二人も手が放せない状況だ。シールドもそろそろ危険域だろう。

ふと隼人は真耶を見ている千冬に目をやる。

千冬は纏う雰囲気通り厳しい性格・言動をしており、『鬼』と形容する人間もいる。

だが隼人にはそう思えなかった。取材した時に感じたが、弟を語る時は口調こそ厳しいものの、目や雰囲気は温かく、優しかった。今真耶に向けている視線もそれに近い。

きっと本来の織斑千冬は優しい娘なのだろう。だが過去に何かが…それこそ性格が変わる程の何かがあったからこそ、あそこまで厳しい性格・言動になったのではないだろうか。

（そう、あいつと…本郷猛と同じように）

隼人は自らの盟友…本郷猛の事を思い出す。

隼人と猛が出会ったのは、隼人がただのカメラマンで猛がレーサーだった頃…二人共まだ普通の人間だった頃だ。

その時はレーサーとそれを取材するカメラマンという関係で、意気投合したとはいえ互いに『さん』付けする仲だった。

その頃の猛は口数こそやや少なかったものの、おやっさん…立花藤兵衛が「子どもの様」と例えるくらい素直で前向きな好青年だった。

隼人が世界征服を企む秘密結社『ショッカー』の存在とその悪業…そしてその被害者達の存在を知ったのは猛と出会ってから暫く後の事だ。

被害者達から話を聞き、自らも調べていく内に隼人は人々から自由も平和も笑顔も何もかも奪ってきたショッカーに怒りを抱いた。

同時にある男がショッカーに戦いを挑んでいる事が分かった。『本郷さん』…本郷猛だった。そして隼人は猛が改造人間の姿に…『仮

面ライダー』に変身した姿を実際にこの目で見た。

（そして俺も…）

―元々武道に長けてたってのと本郷の知人って事でショッカーに目を付けられていた俺は、俺が助けに来ると見越して被害者達を襲っていた連中に捕まった。

―そこで俺は人間としての身体と尊厳を奪われ―改造人間にされた。

―そしてあわや脳改造という所に本郷猛に―『仮面ライダー』に助けられた。

―だが俺を助け出した本郷猛は俺の知っていた素直で、前向きな―子どもの様な本郷猛じゃなかった。

―あいつは改造人間としての苦しみも、人間としての身体と尊厳を奪われた悲しみも、自分から自由を奪ったショッカーへの怒りも、自分と同類とも言える怪人達と戦う事への苦悩も全て仮面の下で押し殺して、人類の自由と平和の為に―そして自分と同じ目に遭う人間をこれ以上増やさない為に戦っていた。

―だがそんな事をして無理が出ない筈がない。本郷猛は性格が変わっていた。

―あそこまで無口じゃなかった。あそこまで思い詰めたり、悩んだり、苦しんだりする男じゃなかった。

―だが、基地から逃げる途中でこの身体が―改造人間としてのこの肉体がいかに忌々しい物かと思い知らされた。

―だから俺にはあいつの気持ちが分かった。性格が変わって当然だ。同時にそれでも人々の為に立ち上がり、戦い続けてきたその強さも。

―基地から脱出した後、俺に詫びる『本郷さん』に俺は一緒にショッカーと戦っていく事を―『仮面ライダー』として生きていく事を伝えた。

―俺は本郷が示した『仮面ライダー』という生き方を貫きたいと思った。

―そして本郷が押し殺してきた苦悩を少しでも和らげたいと思った。

―本郷には支えてくれた『おやっさん』や共に戦う滝和也はいた。勿論互いに大切だと思っている。

―だが改造人間としての、そして『仮面ライダー』としての苦悩を本当に共有出来るのは、その時には俺しか居なかった。

―結局、本郷もそれを了承して、それ以来俺たちは『本郷』、『一文字』と呼び合う対等の戦友、共犯者―そして地獄への道連れとしてショッカーと、それに続く悪の組織と戦い続けた。

―そして俺も本郷と同じように仮面の下に苦しみも、悲しみも、怒りも、憎しみも、苦悩も全て押し殺す事にした。

そう考えていた隼人だが、地面に叩き落とされた『赤鉄』…真耶を見て我に返る。

「真耶ちゃん!?」

「流石に無理が…シールドエネルギーも残り僅かだろうし…」

どうやら真耶はハインリヒに完全に捕まったようだ。

隼人は思考を打ち消し、今は真耶を見守る事に専念する事にした。

「『赤鉄』の状況は？」

「現在シールドエネルギー残量は２５％を切っております」

「…『ＶＴシステム』の方は？」

「正常に停止中です」

「ご苦労」

アリーナ管制塔内でオペレーターに国防軍の制服を着た女が声をかける。

そしてドイツ軍の制服を着た女に声をかける。

「今回は『シュバルツェ・ハーゼ』をお貸し頂きありがとうございます、リッベントロップ少将」

「なに、いい機会ですよ、大島少将…やはり篠ノ之博士は欠席ですか」

「ええ、『ヴァルキリー・トレース・システム』が余程気に入らないのでしょう」

国防軍の制服を着た女…大島とドイツ軍の制服を着た女…リッベントロップは不在の篠ノ之束について話す。

『ヴァルキリー・トレース・トレース』…通称『ＶＴシステム』とは日米英中仏独露の七ヶ国で共同開発を進めてきた新たな戦闘支援システムである。

概要は精鋭揃いのモンド・グロッソ出場者の戦闘データを再現・実行するというものである。

理論上操縦者が素人であってもモンド・グロッソ部門優勝者…『ヴァルキリー』や総合優勝者…『ブリュンヒルデ』に匹敵する戦闘力を発揮出来るとされる。

特に日独の二ヶ国が開発を主導しており、現在日本の代表候補機『赤鉄』に試作型を搭載している。

しかしＩＳの開発者篠ノ之束を始めとする強硬な反対論の存在と、テストが不十分という理由で搭載こそされているが、使用は出来ないよう封印措置が施されている。

本当ならば今回の模擬戦でテストしたかったが仕方ない。

「しかし大島少将、何故彼女に『赤鉄』…ＶＴシステムを？」

「彼女は適性こそ低めですが、かなりの技量を持っています。テストには最適でしょう」

ＶＴシステムを使えば操縦者が素人でも『ヴァルキリー』や『ブリュンヒルデ』に匹敵するとされているが、あくまで『理論上』である。

実際は操縦者の技量にある程度左右されてくる。特にまだ大会が１回しか行われておらず、データが不足している現状では尚更だ。

そして適性がＡ以上あるような操縦者ならそもそもＶＴシステムのメリットは少ない。

敢えて言うなら年若く経験不足の代表候補生が使うならそれを補えるだろうが、経験を積むとメリットなど無いに等しい。

そこで適性が低く、かつ腕が立つ山田真耶に白羽の矢が立ったのだ。

とはいえ今回はそんな事はあまり関係ないが。

そんな事を考えながら大島はモニターを眺めていた。

（やっぱり無理か―）

シュバルツェ・ハーゼ副隊長ハインリヒの攻撃を受け地面へと叩き落とされ、『赤鉄』を装着した山田真耶は考えていた。

「よくやった。貴君の技量は確かに私に迫っていた。だが経験が不足している…一言で言えば未熟、だ」

ハインリヒが淡々と告げる。

事実だ。最初は何とか食らい付けた真耶だったが、経験の差はどうしようもなかった。

動きは読まれ、読みは外され、武器は殆ど奪われた上、シールドエネルギー残量も既に４分の１を切った。

勝ち目などあろう筈もない。

他の二人もこちらを助ける余裕はないだろう。

負けだ。詰みだ。完敗だ。

（―そうだよね、これが私の実力だから仕方な―）

真耶の視界にハイパーセンサーから入ってきた観客席の様子が見えた。

（一文字隼人さん―織斑千冬さん―）

隼人と千冬の姿が目に入った。二人とも不安そうにこちらを見ている。

―試合が終わった後でまた君の笑顔を撮らせてくれないかな？

隼人が言った言葉が響く。

（―ここで負けたら―笑顔なんて―最高の笑顔なんて―見せられる訳がない―）

嫌だ。笑顔を誉めてわざわざここまで駆け付けて私を応援してくれた人を裏切りたくない。

（―それに―期待してくれているあの人を裏切りたくはない―）

嫌だ。期待してここまで来てくれたのに、ここで負けたらあの人の―織斑千冬の期待を無駄にしてしまう。

（嫌だ―嫌だ―負けたくない―）

真耶の中に勝利への渇望が沸き上がる。

―私の笑顔を待ってくれている一文字さんの為にも

―私に期待してくれている織斑千冬さんの為にも

―私は負けられない―負けたくない

―私は二人の為にも勝たなくちゃいけないんだ

―勝ちたい、勝ちたい、勝ちたい―

―私は！絶対に！負けたくない！！

その渇望に応えるように、『赤鉄』の中に潜む『何か』が、核(コア)に繋がり、目覚める。

けたたましく警報音を鳴らり続ける。『赤鉄』の状態を示す映像も先程から赤く点滅し続けている。

「どうした!?『赤鉄』に何があった!?」

大島がオペレーターに状況を確認する。

「そ、それが…ブ、ＶＴシステムが…」

「…『赤鉄』に…搭載されている…ＶＴシステムの…作動が…確認されました…」

「馬鹿な!?封印していた筈だ!?」

大島は叫ぶがモニターにはＶＴシステム作動中の表示が踊っている。

「今すぐこちらからＶＴシステムを遮断しろ!」

「そ、それが…先程から試しているのですが…こちらからの制御を一切受け付けません…」

「何だと…」

『赤鉄』の異常事態はそれだけで終わらなかった。

「シ、シールドエネルギー残量が、急速に回復中！…７０…８０…９０…１００％を…初期シールドエネルギー量を越えています！」

「内部ナノマシン装甲が…皮膚を通して操縦者と…山田真耶と直接接続していってるのか！？」

「コア・ネットワークが遮断された！？これじゃこっちから何も出来ない！」

慌ただしくオペレーター達の報告や怒号がに飛び交う。

「大島少将…これは一体…？」

「…分かりません…ですが…」

あまりに不可解で、切迫した状態に指示を出しつつも呆然と二人は見ている他なかった。

地面に倒れていた『赤鉄』…山田真耶が立ち上がる。表情は伺えない。

「何だ…あの光は…？」

ハインリヒは真耶から…『赤鉄』の発せられる緑色の光を見て呟く。そして『赤鉄』に起こった事を知り驚愕する。

「シールドエネルギーが回復している！？」

『赤鉄』のシールドエネルギーが回復しているとハイパーセンサーは告げていた。

しかも初期値を越えて尚シールドエネルギー量は増加している。

有り得ない。原則ＩＳはシールドエネルギー回復機能は持たないし、外部補給も手間がかかり、作戦行動中の回復は困難だ。

それを『赤鉄』は容易く回復…むしろ増幅しているのだ。

一方、観覧席の方でも一文字隼人と白鳥玲子、そして織斑千冬の三人が真耶の異変に気付いていた。

「いつもの彼女じゃ…山田真耶じゃない…？」

「それだけじゃない…見ろ」

「ナノマシンが…彼女に！？」

隼人の指摘で玲子と千冬が正面を向いている真耶の顔を見る。

少し遠い上、見にくいが、まるで目尻から零れた涙のように目から緑色のラインが…『赤鉄』内部から目まで伸びたナノマシンのラインがある。

やがて真耶は少し顔を上げ、隼人や千冬、玲子…会場にいる者に全貌が…目が見える。

瞳は金色に染まり、螺旋模様が浮かんでいるようにも見えた。

「うわあぁぁぁぁぁっ！！」

真耶が絶叫…いや咆哮を上げる。

同時に『赤鉄』周囲にスパークが発生し、真耶はナノマシンに全身を覆われ、『赤鉄』も装甲を変形させその姿を大きく変える。

「何故だ！？何故『形態移行』出来る状態じゃないＩＳが変形するんだ！？」

それを見て千冬が…開発者の篠ノ之束に次いでＩＳに詳しい千冬が思わず叫ぶ。

ＩＳには自己進化機能が搭載されている。ＩＳコアが操縦者の特性を学習し、経験を積む事で操縦者に合わせより性能を引き出せる様

にその形状や性能を大きく変える…これが『形態移行』である。
しかし逆にある程度操縦者が習熟しなければ『形態移行』は起こらない。
真耶にはそこまで習熟出来る程の時間は無かった。
そしてＩＳが装甲の形状を変えるのも『形態移行』だけだ。どんなパッケージを装備しても装甲自体が変化する事はない。
つまり千冬の目の前で起こっているのは本来なら有り得ない事だ。
千冬の驚愕を余所に『赤鉄』は装甲の変形を終え、その姿を現す。
真耶を取り込んだナノマシン部分は赤い装甲に覆われて、それまで装甲に覆われていた部分はシンプルな形状となっている。
全身赤い装甲に覆われた姿へと変わった『赤鉄』は、鬼にも見える顔面部分の金色の目らしき箇所を妖しく光らせた。
ドイツ側はハインリヒのみならず、他の２機も全身装甲姿となった『赤鉄』から少し離れて冷静に見極めようとしていた。

もっとも、さしものシュバルツェ・ハーゼといえども異常事態の連続に混乱していたが。

そして『赤鉄』の…山田真耶の異常に気付いた日本側代表候補生も少し下がり真耶へ呼び掛ける。

「真耶！？大丈夫なの！？返事をして！」

「一体どうなってるのよ！？」

しかし二人呼び掛けにも真耶…『赤鉄』は答えない。

『…大尉』

「…少将、如何致しますか？」

暫く思案していたハインリヒだったが、そこに上官のリッベントロップから通信が入る。

『…実戦モードへの切り替えを許可する。速やかに「赤鉄」を無力化せよ』

「！？…もう一度確認します。実戦モードを使用してでも『赤鉄』を無力化せよ、で宜しいでしょうか？」

命令に動揺するハインリヒだが、慌てず命令を確認する。

ＩＳは『アラスカ条約』により無制限の軍事利用が抑制されている。
その為競技用ＩＳは普段は性能を抑えるリミッターが搭載されており、非常時や上官の許可を得た場合のみそれが解除される。
軍用ＩＳにも操縦者が任意で解除可能な模擬戦用に性能を抑えたモードが搭載されている。
現在シュバルツェ・ハーゼが使用しているＩＳは後者であり、現在は性能を抑えている状態である。
当然だ。軍用ＩＳがフルで性能を発揮すれば多大な被害が出る恐れがある。
その為本当の実戦でもなければ軍規で性能を抑えるように義務付けている。
だからこそハインリヒは命令を確認した。これは間違いではないかと。
しかしハインリヒの懸念通りの答えが返ってくる。
『その通りだ』
「…了解しました」
そこでハインリヒは交信を止める。
恐らく何らかの事情が…しかもこちらが質問しても答えられない事

情があるのだろう。

しかしハインリヒは迷う事なく近接用ブレードを構える。

「…悪いが命令だ。止めさせて貰うぞ」

そしてスラスターを噴かして突撃する。

『赤鉄』は立ったまま動く気配がない。

ハインリヒは間合いまで接近し、近接用ブレードを『赤鉄』に振り下ろし…

「何！？」

た所を『赤鉄』は左手で近接用ブレードを掴んで止める。

そしてブレードを掴んだまま、右手にナノマシンにより日本刀型の武器が形成される。

そして掴んだブレード放した瞬間、刀でハインリヒを袈裟懸けに斬る。

「！？」

あまりの威力に吹き飛ぶハインリヒだったが、何とか踏み止まる。

「何だ…今の一撃は…？」

一瞬呆然としたハインリヒだが、アサルトライフルを呼び出し『赤鉄』に向ける。

『赤鉄』は構わずゆっくりと刀を構える。そして構え終わるや、一瞬で間合いに踏み込む。

「何！？」

そしてが撃つ間もなくアサルトライフルを両断し、斬撃の嵐を見舞う。

「あれは…柳韻先生の！？」

観覧席で見ていた千冬には『赤鉄』がどのような剣術を使っているかが一目で分かった。

かつて自分が学び、何度も見てきた篠ノ之道場の…篠ノ之柳韻の剣だ。

だが真耶は篠ノ之柳韻の事すら知らないはず。それが何故使えるのか。

千冬の疑問を余所に追い詰められたハインリヒを助けようと他の2機も動き出す。

「この！調子に乗るな！」

1機がアサルトライフルを呼び出すと同時に撃ち捲るが、『赤鉄』は刀で悉く防ぐ。

そしてナノマシンが刀の形状を解くや『赤鉄』の両拳へと移動し、手甲へ変形する。

変形を終えると『赤鉄』は向き直り、ボクシングで言う『ピーカブースタイル』の様に両腕を顔面の前に付け、スラスターを噴かし突っ込む。

「この！この！」

狙われた方はアサルトライフルで近付けまいとするが、『赤鉄』はフットワーク…スラスターとＰＩＣを活用して銃撃を躱しながら間合いへ入ると同時に左ジャブを見舞う。

「しまった！」

その一撃で壁に叩きつけられたと見るや追撃に入り、そのままフック、ストレート、アッパーなどボクシングのコンビネーションのようにラッシュを仕掛ける。

「あれ…第１回モンド・グロッソアメリカ代表の戦い方じゃない！」

見ていた玲子が叫ぶ。

玲子は多くのＩＳとＩＳ操縦者を、そして戦い方を目にしてきた。

そしてボクシングスタイル、しかもピーカブースタイルを使って軽快なフットワークで敵に接近する戦術を取り、また使える人間は世界中に第１回モンド・グロッソアメリカ代表のクロケットしかいない。少なくとも玲子は他に知らない。

「こいつ！」

しかしもう1機がワイヤーを射出し、『赤鉄』に巻き付け、動きを止める。そして僚機の離脱を見るやワイヤーを赤熱化させ、切断しようとする。

しかし『赤鉄』は無造作にワイヤーを引きちぎると手甲を形成していたナノマシンが再び変形を開始し、今度は2本1対の柳葉刀へと形を変え、『赤鉄』の手に握られる。

そして『赤鉄』は突撃すると2本の柳葉刀を駆使してそのＩＳを攻め立てる。

そして敵が防御へ手一杯となるや浴びせ蹴りを放ち距離を少し放すと、柳葉刀の柄を連結させる。

するとナノマシンがまたも変化を開始し、連結した1柳葉刀は旗が付いた槍へと変形する。

『赤鉄』は旗部分でＩＳを絡め取り地面へと投げ飛ばす。そして辛うじて体勢を立て直したＩＳに対して槍による突きの連打をお見舞いする。

「ならあの武器と動きは…中国代表かよ！？」

隼人はＩＳにそこまで詳しくはない。

だが元々武道に精通している為一度動きを見れば、その武術家の特徴くらいは理解出来る。

そして隼人は今の『赤鉄』と同じ武器で、同じ動きで戦った人間を一人だけ見た事がある…第1回モンド・グロッソ中国代表の崔だ。

今の『赤鉄』の動きはかつて隼人が見た動きそのものだ。

「だったらさっきのあの刀と剣術も…？」

「恐らく、『暮桜』の武器、『雪片』で…」

「…君の剣術だろうな」

何かに気付いた千冬に対して玲子と隼人は自らの推測を述べる。

隼人と玲子は『赤鉄』の武器や動きが第1回モンド・グロッソ出場者と同じと気付いた。

最初に見せた日本刀と剣術も第1回モンド・グロッソ出場者で総合優勝者『ブリュンヒルデ』…千冬がモンド・グロッソで見せたそれであろう。

ならば先程ハインリヒをレイピアで突き崩したのはフランス代表のビショップ、そして割り込もうとした2機を鎖付き鉄球で弾き飛ばしたのはロシア代表のザビコフがそれぞれ第1回大会で見せたそれであろうし、実際武器も動きも同じだ。

今『赤鉄』はカナダ代表のグラハムが第1回大会で使った二丁斧を、第1回大会と同じ動きで振り回し3機を追い詰めていた。

その内1機が耐えられず、地面へ叩き落とされる。

『赤鉄』は他の2機を弾き飛ばし、その1機へ追撃をかける。
そしてそのまま何度も何度も、執拗に斧をＩＳへと振り下ろす。
「ちょっと真耶！止めなさい！それじゃ…それじゃ…！？」
「真耶おかしいよ！返事くらいしなさいよ！」
呆然と見ていた日本代表候補生の二人だが、我に返り止めようとする。
確かにＩＳにはシールドバリアがあるし、いざとなれば『絶対防御』が発動する為基本的に搭乗者が死亡する事はない。
だが継続して攻撃され続ければ話は別だ。『絶対防御』自体の防御力は確かに『絶対』に近い。だが発動にはシールドエネルギーを大量に消耗する上発動時間も一瞬だ。
『絶対防御』発動後も強力な攻撃を受け続ければ搭乗者の死亡率は跳ね上がる。
つまり『赤鉄』があのまま攻撃を続ければ搭乗者はほぼ確実に死ぬ。
そんな事態になれば国際問題確実だし、何より真耶はこの先の人生を全て棒に振る事になる。
『各機、リミッターを解除する。速やかに「赤鉄」を無力化せよ』
そこに大島少将から二人に通信が入る。

「し、しかし！？」

『これは命令だ！責任は私が取る！速やかに「赤鉄」を無力化せよ！』

言い募ろうとする二人に対して大島はピシャリと言い放つ。

確かに今の『赤鉄』はおかしい。ここはやむを得まい。

「…了解」

それだけ答えると日本代表候補が操縦する『刃鉄』は1機はアサルトライフルを、1機は近接ブレードをそれぞれ呼び出す。

「ごめん真耶！ちょっとくすぐったいけど我慢して！」

「痛みは一瞬になるよう努力はするから！」

それだけ言うと2機はアサルトライフルを『赤鉄』に向けて発砲すると同時に近接用ブレードを振りかざし突撃する。

しかし『赤鉄』は斧の形をしたナノマシンを今度はフラフープにも似た大型のチャクラム型の武器と、新体操用のリボンにも似た鞭状の武器へと変形させ、アサルトライフルを放った『刃鉄』にチャクラムを投げつけると、鞭で近接用ブレードを持った『刃鉄』を攻撃する。

「真耶！？」

「友軍まで攻撃する気か！？」

驚愕の声が上がるが、『赤鉄』は構わず『刃鉄』に…友軍での日本代表候補生へ攻撃を開始した。

「何故だ…何故…？」

慌ただしい管制塔内で大島は呟く。

「欠陥があったと言うのか？…私が…人間が手を出していい領域ではなかったと言うのか？」

ＩＳをより完成された兵器として、役立てたかった。

大島とリッベントロップは日本とドイツでそれぞれＶＴシステムの開発を主導してきた。

ＩＳは確かに既存の兵器を凌駕する力を持っているが、欠点も多い。

それは技術進歩を待つ他にないか、或いは既存の兵器による補完もしくは併用で何とかなるのが大半だ。二人にはにはどうしようもないか、既に解決策が存在している。

しかし操縦者の資質、能力の話となると別だ。

ＩＳは女性しか乗れない上に適性によりその能力は大きく変動する。山田真耶のような例外もいるが。

しかもＩＳは操縦者の資質や能力により発揮できる力に大きく差が出てくる。

例えば世界最初のＩＳ『白騎士』はミサイル２３４１発の内約半数を単機で撃墜した上に、各国が送り込んだ艦隊を撃破、包囲を突破している。

しかし『白騎士』にそんな事が出来たのは性能よりもむしろ操縦者で世界最強のＩＳ操縦者『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬の能力に因る所が大きい。

仮に『白騎士』より性能の向上している現行機を使って同じ事をするとしても、千冬以外にそんな事が出来る操縦者などいない。

言い換えればＩＳとは操縦者の技量に大きく左右される不安定な兵器なのだ。

勿論戦闘機や戦車も技量や練度がものを言う時もあるが、ＩＳほど極端に、戦略レベルで影響が出る迄の差は無い。

操縦者の技量が優れていても最終的に物量や戦略、性能差が大きければ敗れるという事を日本やドイツは嫌という程思い知らされた。

しかしＩＳはそんな認識をひっくり返してしまった。高性能のＩＳ

に優秀な操縦者を乗せれば物量も戦略も意味をなさないと『白騎士事件』は証明してしまった。

同時に各国の参謀達は戦略の練り直しに苦心する事になった。

そのように不安定な物が自国も、仮想敵も主戦力であるとの前提で今後の戦略や整備計画を立てなければならないのだ。

戦車や戦闘機は性能はある程度一定であり、技量差も誤差に納まる範囲として比較的容易に発揮できる戦力は計算出来る。それでも時に簡単に破綻する事もある。

まして操縦者の技量や調子で大きく変わるＩＳを主力に据えて発揮可能な戦力を計算して戦略を立てろというのは困難である。

特に自国の操縦者の技量はともかく仮想敵の操縦者の技量ばかりはデータを入手するか、実際に戦ってみなければ分からない。しかもデータを入手した所で操縦者の技量など短期間で向上するなどザラにあるので信用しきれない。

一応ＩＳ適性という基準はあるが適性が高いから低い者より技量が優れているとは限らない。

だから二人はＩＳがより安定して、一定以上の戦果を挙げられるように…より完成した兵器とする為にＶＴシステムの開発を志した。

ＶＴシステムは発動すれば操縦者の技量差に関係なく一定の動きをし、一定の戦力を発揮し、そして一定の戦果を挙げる。

そうなれば戦力計算も出来るようになるし、安定した戦略や国防計

画を立てられる。

同僚や上層部、他国には他の思惑があったのかも知れないが少なくとも二人はそう信じていた。

そして信じた結果が日本代表候補生とドイツ代表候補生を纏めて攻撃している『赤鉄』だ。

「…教官が…目黒教官が…言ってた通りね…ヒロ…」

「『どんな兵器も最後に引き金を引くのは意志を持った人間であるし、そうであればならない事を忘れるな』…ね、アンナ？」

そして二人は一変して名前で呼び合う。

二人はまだ新兵の頃にリッベントロップが交換留学という形来日して以来、プライベートでは名前で呼び合う程の親友の仲だ。

そして新兵時代に当時国防軍の教官を務めていた目黒圭一による指導…通称『目黒学校』を共に『卒業』した『同期生』でもある。

ちなみにこの『目黒学校』の『卒業者』は、後に国防軍のＩＳ運用に最初期から携わる岩田、山田両名にＩＳ学園創設を主導する轡木十蔵、フランスから留学して後に大手ＩＳ企業『デュノア社』を創業する事になるジャン・デュノア、それに大島とリッベントロップなどＩＳに関わる人間が多い事で知られている。

「…そうね、引き金を引く事すら機械に委ねさせてしまったＶＴシステムがこうなったのは…むしろ必然なのかも知れないわ…」

大島がぽつりと呟く。

ＶＴシステムは一度作動してしまうと操縦者の意志や操作を一切受け付けずに敵を全て排除するか、機体が破壊されるまで戦闘を続行する。

そんなあまりに問題がある代物に手を出してしまった時点で、こうなる事は決まっていたのかも知れない。

やがて管制塔に大きな揺れが発生し、モニターが赤く染まる。

声を上げる。

「何があったか！？」

「保護シールド発生装置に損傷！間もなく保護シールドが解除されます！」

「何！？」

ＩＳが模擬戦を行うアリーナには観覧席や管制塔に流れ弾が飛んでこないように保護用のシールドバリアが常に発生している。

それが無くなれば観覧席や管制塔にも危険が及ぶ。観覧席が空いているのが不幸中の幸いだろうか。

「観覧席にいる人間を大至急避難させろ！避難完了を確認後はお前達も直ちに退避せよ！」

「し、しかし少将は…？」

「…私はお前達の退避が完了するのを見届けから退避する。質問に答える暇はない、大至急取り掛かれ！」

大島は部下達に檄を飛ばした。

殆どの人間が退避した観覧席に、一文字隼人と白鳥玲子、そして織斑千冬はまだ残っていた。

『赤鉄』の変貌に三人とも見入っていた事もあり避難誘導アナウンスへの反応も、動き出すのも遅れてしまった。

今では避難の為に近くの出入口まで三人揃って走っている。

漸く出入口の手前までやって来た三人の真後ろから、ＩＳの１機が吹っ飛ばされてくる。

「クソっ！！」

気付いた隼人は舌打ちすると玲子と千冬を抱え上げ、横っ飛びにＩ

Ｓを回避する。

そのＩＳは日本の代表候補生が搭乗している『刃鉄』であった。

『赤鉄』が『刃鉄』の前に降り立つ。

そして『刃鉄』をナノマシンで形成された『雪片』で撃ち据え、斬撃を浴びせ続ける。『刃鉄』はそれを近接用ブレードで必死に防ぐ。

隼人はその光景を見るや

「玲子ちゃん！カメラ頼む！」

玲子に自分のカメラを預け

「止めろ！」

そのまま素手で『赤鉄』へ挑む。

そして『赤鉄』が『雪片』を振り上げた所に横から飛び蹴りを食らわせる。

「一文字さん！？」

「大丈夫よ！それより千冬さんも下がって！」

千冬は一文字を止めようとするが玲子に制される。

そして『ただの人間』が放った筈の飛び蹴りを食らって大きくたたらを踏んだ『赤鉄』を見て千冬は思い止まる。

「…ふざけんじゃねえ…ふざけんじゃねえぞ！この鉄屑野郎！！」

そして隼人は『赤鉄』へ咆哮する。

隼人は一連の行動が山田真耶の意志を無視して『赤鉄』の…『鉄屑野郎』の中にある『何か』が起こしていると確信していた。

それが何であるかは隼人は知らないしどうでもいい。

隼人にはショッカーのように山田真耶の自由や意志を奪い、友軍への攻撃という本人の望まぬ悪事を働かせている『鉄屑野郎』がどうしても許せなかった。

「真耶ちゃんを…山田真耶を返して貰うぞ！」

そして隼人は再び殴りかかる。

しかし『赤鉄』は『雪片』を手甲に変えるとスラスターを噴かして隼人にタックルをかけて反対側のアリーナの壁へ隼人諸共突っ込む。

「…がはっ…！？」

流石の隼人も衝撃をまともに受け、血反吐を吐く。

そこに隼人を敵と認識した『赤鉄』がラッシュを仕掛ける。
隼人は辛うじて防御をするがボディや顔面にガードをすり抜け、突き破った『赤鉄』の拳が突き刺さり、筋肉が悲鳴を上げ、皮膚が切れ血が流れ飛ぶ。
そこにＩＳが攻撃を仕掛けるが、一瞬で背後に回り『雪片』に斬り捨てられ、鎖付き鉄球で吹き飛ばされ蹴散らされる。
「…鉄屑…野郎…まだ…終わっちゃ…いねえぞ！」
そして身体の至るに血を流しながらも突撃する隼人の首を『赤鉄』は掴むと、スラスターを噴かして壁へ叩き付け、締め上げる。
「…取り…込まれる…な…真耶…ちゃん…目を…覚まして…くれ…！」
『赤鉄』に取り込まれている真耶に隼人は必死に呼び掛けるが、真耶には届かない。
（勝つんだ！勝たなきゃ！絶対に負けられないんだ！負けたくないんだ！）
体内に侵入したナノマシンの影響でＶＴシステム発動後の真耶は極度の興奮状態となり周囲や自身の置かれている状況が一切頭に入っていなかった。
自分が今まで何をしていたのかも、今自分が隼人の首を締めている事にも気付いていない。
「…取り…込まれるな…真耶…ちゃん…そんな…薄汚い…鉄屑野郎

…なんか…に…」

そして隼人は力を振り絞り腕を振り払うとあらん限りの声で絶叫する。

「真耶あああああああああああああああ！！！！」

「！？」

その叫びが耳に入る。

「…隼人…さん…？」

そしてナノマシンが体内から排出され、瞳の色が元に戻ると同時に真耶は我に返り、自分と周囲を見渡す。

視界に映ったのは糸のようなモノで拘束されている自分。

あちこちが酷く破壊されたアリーナ。

武装が破壊され、シールドが削られていると分かるドイツ軍と日本国防軍のＩＳ。

そして、血塗れになりながら壁に寄りかかる一文字隼人と…隼人の

血がこびり付いた『赤鉄』の…自分の手。

「…あ…あ…あ…」

そこで漸く真耶は今まで取り返しのつかない事をしてきたと理解する。

「いやああぁぁぁぁぁ！！」

真耶は悲鳴を上げるがそれを嘲笑うかのように『赤鉄』は動き出す。

「！？止まれ！」

『赤鉄』を止めようと操作するが、『赤鉄』は隼人を殴り続ける。

「止まれ！止まれ！」

止めようと藻掻くが、『赤鉄』は挑みかかるハインリヒを柳葉刀で切り裂く。

「止まれ！止まれ！止まれ！」

止めさせようと手足を動かすが、『赤鉄』はドイツ軍の2機ヘレイピアの連続突きを見舞う。

「止まれ！止まれ！止まれ！止まれ…止まって…止まって…」

泣きそうになりながら止めようと足掻くが、『赤鉄』は『刃鉄』2

機を二丁斧で打ち据える。

「…止まって…止まって…お願いだから…止まって……何で…何で…」

涙を流し止めようと抵抗するが、『赤鉄』は鞭で立ち上がろうとする隼人を打ち続ける。

「…私には…もう…止められ…ない…」

泣きながら最後の抵抗を続けていた真耶だが、やがて自分には『赤鉄』を止められないと悟り、抵抗を止め…絶望した。

そして『赤鉄』が『雪片』を形成し、隼人に止めを刺すべく振り下ろ

「…させるか！！」

すが、ＩＳの近接用ブレードを持った人間に割り込まれ、人間が『雪片』を跳ね上げると当身で『赤鉄』を弾き飛ばし、ブレードを両手で構え直す。

ブレードを構えているのは織斑千冬だった。

居ても立ってもいられなくなった千冬は近くに落ちていたＩＳ用のブレードを掴み『赤鉄』へ斬りかかったのだ。

「玲子さん！一文字さんを！」

そして白鳥玲子に隼人を託すと『赤鉄』と対峙し、ブレードを向け

る。

「…織斑…千冬…さん…あの…一つ…お願い…しても…いいですか？…」

そこに『赤鉄』から真耶の声が聞こえてくる。

真耶は泣いていた。声を聞いた千冬にもそれが分かった。

「…何だ？」

「…私…味方も…攻撃して…敵も…殺そうとして…一文字さんも…」

「違う！それは君のせいじゃ…」

「…でも…私が…私なんかが…勝ちたいなんて…思ったから…こんな事に…私が…こんな事を…」

「…お願い…します…もう私じゃ…止められません…だから…貴女が…止めて下さい…私を…私を…」

「…私が死ねば…殺せば…きっと…止まります…だから…私を…私を…」

「私を！殺して下さい！！」

「！？」

真耶のあまりに悲痛な叫びに千冬は動揺する。

しかし『赤鉄』はそんな真耶に構わず『雪片』を構える。

実際止めるには機体を破壊するか…真耶を殺すしかないと千冬は直感的に悟る。ＩＳが無い現状、千冬がまだ可能なのは…後者だけだ。

（…何が世界最強だ…何が『ブリュンヒルデ』だ…たった一人助けられない私の…どこが…最強だ…！）

千冬は唇を血が出る程に噛み締める。

しかし、意を決すると『赤鉄』を睨み付け、ブレードを構え直す。

「…先に地獄で待っていろおぉぉぉ！！」

そして叫びながら千冬は踏み込み斬り掛かる。『赤鉄』が刀を振り下ろすが構わず千冬は相討ち覚悟で真耶を斬ろうと…

「…待ってくれ！」

した所を何者かが横から千冬に飛び付き共に地面を転がり、『赤鉄』の斬撃を逃れ、距離を取る。

「…俺に、任せてくれ」

「一文字さん…」

一文字隼人だった。

隼人は立ち上がると『赤鉄』…いや真耶に語り掛ける。

「そんな…そんな悲しい事言うなよ…真耶ちゃん…そんなの…君には似合わないよ…」

血塗れになりながらも隼人はいつものように笑ってみせる。

「…一文字さん…でも…」

「分かってるさ…君がこんな事…したくなかったって事も…君が…俺や…織斑千冬の為に…勝ちたいって思った事も…」

「だから…そんな事…俺や…彼女の為にも…言わないでくれ…俺は…君の笑顔が撮りたいから…勝手に馬鹿やったんだから…」

「…でも…私は…」

「俺は…君が優しい子だって…本当は強いって…信じてる…だから…頼む…君も俺を…君を信じている俺を…信じてくれ…」

「そして…信じてくれ…他の誰が何と言おうと…俺は…君の…真耶ちゃんの…」

「俺は、味方だ」

「一文字さん…」

沈黙する真耶に笑いながら隼人は続ける。

「もう一回聞くよ…君は俺に…どうして欲しい…？君が…望むなら…君を殺す以外なら…何でもする…だから…俺が…君の…味方だって…信じてくれ…」

地面に膝を付き息も絶え絶えの隼人に真耶はやがて口を開く。

「私を…私を…」

「私を、助けて！！」

「…その言葉を待ってたぜ…！」

真耶の叫びを聞くや隼人は不敵に笑い足に力を込め立ち上がる。

「…聞こえるか？鉄屑野郎…お前が真耶ちゃんを取り込んじまったお蔭で俺は今まで手加減してやってたが、真耶ちゃんが俺に助けを求めてるからな…悪いが今度は本気で行かせて貰うぞ！」

そしてまるでそれまでの様子か嘘のように闘志に満ち溢れた声と表情で『赤鉄』に対峙する。

「と、言うわけだから下がって貰えないか？織斑千冬さん」

「しかし生身で…ましてやそんな身体で…！」

「お見せしよう！」

止めようとする千冬の言葉を遮り、隼人は上着の前を開ける。
隼人の腰には何やら中央にシャッターのついた機械的なベルトが付いていた。

「一文字さん…貴方は…一体…？」

おずおず隼人に尋ねる千冬に対して隼人は笑って答える。

「ショッカーの―人々の自由と平和と笑顔を奪う悪の敵」

「そして人類の―」

「―山田真耶の味方、さ」

それを聞くと千冬は玲子に促され、黙って後ろに下がる。
そして隼人は『赤鉄』を見据える。

―本郷、俺はお前に感謝してる。

―お前に助けられた事―お前の戦友、共犯者―そして地獄への道連れになった事―お前が俺に示した『仮面ライダー』として生きていく道を選んだ事―俺は少しも後悔なんかしちゃいない。

―お前と出会ったお陰でショッカーに与えられたこの忌々しい身体で多くの罪もない人々の自由を、平和を、幸せを、命を、笑顔を守り、助けられるんだ。お前には感謝こそすれ恨みなんかある筈がない。後悔なんかある筈がない。

―待ってくくれ、真耶ちゃん。俺が君を―そのふざけた鉄屑野郎から君の自由を、平和を、幸せを、命を、そして笑顔を守ってみせる。本郷と―俺が今までずっとそうしてきたように。

―だから最後まで諦めずに待っててくれよ―

―必ず―必ず―俺が―君を―助けてみせる！！

両腕を水平に右へと伸ばす。そのまま円を描くように反対側まで持って行く。悪と戦う為に…人々を守る為に何回もやってきた、己の中にあるスイッチを入れる動作。

「変身！！」

両腕を曲げ、左腕を垂直に立てて動作が終わればベルトのシャッターが開き、隠されていた風車が回る。

そして風車が回れば一文字隼人の身体を赤い手足のバッタを模した改造人間の姿へと変える。

「行くぜ、鉄屑野郎…今度は俺が相手だ！！」

仮面の内に怒りを秘め、人々の笑顔と幸せを守る為に闘う力の戦士…2番目の仮面ライダー『仮面ライダー2号』は少女を悪から助け出すべく赤い戦乙女の亡霊に挑みかかった。

『赤鉄』は一文字隼人…仮面ライダー2号を見るや『雪片』を構えスラスターを噴かし突撃する。そして『雪片』を仮面ライダー2号目がけて振り下ろす。

「遅い！」

しかし仮面ライダー2号はあっさり白羽取りで受けとめる。

「本物はこの百倍は早いぜ…偽者さんよ！」

そして自慢の怪力で『雪片』を中程からあっさりとへし折るとそのままお返しとばかりに正拳突きで『赤鉄』を殴り飛ばす。

「うおぉぉぉぉっ！」

そのまま仮面ライダー2号は追撃に移り、パンチの連打で『赤鉄』

のシールドを一気に削り取っていく。

『力の2号』と称され、数十トンはある戦車すら持ち上げてひっくり返す程のパワーが込められたパンチの連打の前に『赤鉄』は後退を余儀なくされる。

そしてナノマシンで手甲を生成すると手数で攻めようとスラスターを噴かしながら突っ込み、ラッシュを仕掛ける。

「…上等だ！」

しかし仮面ライダー2号は怯まずに真っ向からノーガードでの殴り合いに応じる。『赤鉄』の拳をその身に何発も受けながらも仮面ライダー2号は負けじと殴り返す。

壮絶な殴り合いを制したのは仮面ライダー2号であった。『赤鉄』は仮面ライダー2号のストレートを受けて大きく体勢を崩す。

それをチャンスと見るや仮面ライダー2号は飛び上がり、拳に力を込め落下の勢いも乗せ一撃を叩き込もうとする。

「ライダーパ…！」

（…駄目だ！これでは威力が有りすぎて真耶ちゃんが…！）

内部に閉じ込められている真耶の事を考え、動作を中断する。

すると『赤鉄』はチャンスと見て槍を形成し、落下してくる仮面ライダー2号に向けて思い切り突き出す。

「…ぐぅ…！」

槍を辛うじて身を捻り直撃こそ避けるものの、胸の『コンバーターラング』を槍先が掠め、嫌な金属音が鳴り火花が散る。

更に『赤鉄』は旗で仮面ライダー2号を絡め取り地面へと投げ落とし、槍を二丁斧へと変形させ、仮面ライダー2号へと振り下ろす。

「この…少しは…やるじゃねえか…」

斧で全身を滅多打ちにされ、血飛沫を飛ばしながらも、仮面ライダー2号は急所への攻撃だけガードし、隙を伺う。

（きっと隙は出来る…真耶ちゃんを助けられるだけの隙が！）

仮面ライダー2号のガードが固いと見るや『赤鉄』は斧をレイピアへと変え、軽やかに連続突きを放つ。

仮面ライダー2号は身を躱して突きを悉く回避すると逆に踏み込み、手刀でレイピアを斬り落とす。

『赤鉄』はスラスターを噴かして後退すると今度は鎖付き鉄球を形成し、仮面ライダー2号へ向けて遠心力を付けて放つ。

「なんの！」

仮面ライダー2号はこれを正面から受け止め、そのままベアハッグの要領で鉄球を粉砕する。

しかし『赤鉄』はその隙に既に『雪片』を手に持った状態で突撃し、そのまま強烈な一太刀を仮面ライダー2号へと浴びせる。

「…グッ！？」

さしもの仮面ライダー2号もまともに一撃を貰い、動きが止まる。そしてそれを機に『赤鉄』は猛然と仮面ライダー2号へと打ち込んでいく。

仮面ライダー2号は急所への斬撃だけを反らし、防ぐが、手足を何回も斬られ、次第に防御も回避もままならなくなってくる。

十分仮面ライダー2号が弱ったと見るや『赤鉄』は止めを刺そうと『雪片』を振り上げ一撃を放とうとする。

「…この時を待ってたぜ！」

しかし仮面ライダー2号は不敵に言い放つと右の拳を握り、胴体ががら空きとなった『赤鉄』目がけて渾身の突きを放つ。

「ライダァァァパァァンチ！！」

そしてそのパンチが太刀が振り下ろされる前にシールドを突破し、装甲を突き破ると仮面ライダー2号は踏み込んで更に腕を奥へと突き込み、目測と手探りで真耶の腰を探り当てそのまま腕を回す。

「少し我慢してくれよ！真耶ちゃん！」

そしてその怪力を使って真耶をナノマシンの繭から…『赤鉄』の戒

めから一気に外へと引き摺り出す。

すると『赤鉄』は糸が切れた人形のように動きを止め、沈黙する。

仮面ライダー2号は真耶を抱えたまま高く飛び上がり、『赤鉄』から離れた場所へと着地し、真耶を地上へと下ろす。

「大丈夫、だったかい？」

そして仮面ライダー2号…一文字隼人は真耶に優しく語り掛ける。

「…一文字さん…私…」

「おっと、それは無しだ。君が無事ならそれでいいさ」

真耶が申し訳なさそうに隼人…仮面ライダー2号に何か言おうとするが、それを仮面ライダー2号が遮る。

真耶には仮面ライダー2号が…一文字隼人が仮面の下で笑っているような気がした。

そして真耶も笑い返そうとするが…

「一文字さん！」

「下がれ真耶ちゃん！」

真耶の悲鳴と仮面ライダー2号が叫ぶのと同時に仮面ライダー2号の背後から強烈な斬撃が襲い掛かる。

仮面ライダー2号は振り向くと真耶を庇うように前に立ちふさがり、空手でいう『十字受け』で斬撃を受け止める。

「そ、そんな…どうして…？」

「…しつこ過ぎるヤツは女の子にも男にも嫌われるぜ？鉄屑野郎…！」

唖然とする真耶を尻目に仮面ライダー2号は自らに斬撃を加えた敵に言い放つ。

そこには、操縦者を失って尚目を妖しく光らせて『雪片』を手に持った『赤鉄』がいた。

何処かのモニタールームで、篠ノ之束は『赤鉄』の映像を眺めていた。

（当然の報いだ…あんな醜い、不細工なシロモノを私は認めない）

内心束は冷たく吐き捨てる。

束は計画当初からＶＴシステムの開発に強硬に反対していたが、結局押し切られてしまった。

そこで束はＶＴシステムがいかに醜く、愚かしく、不細工なシロモノであるかを知らしめてやるべく腹いせと今後の為の実験も兼ねて『赤鉄』にいくつか細工を施しておいた。

まず『赤鉄』完成直後に密かにＩＳコアをハッキングしてＶＴシステムを封印状態と偽装し、操縦者の感情が高ぶると自動的にＶＴシステムが発動するトラップをコアに仕込んでおいた。

また、後々開発予定の新型機に搭載するつもりであるエネルギー増幅効果を持った『単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）』発現するようにコアにプログラムした。

これはきちんとプログラム通りに『単一仕様能力』が発現した為一応成功とは言えるものの、エネルギー増幅率は１０倍程度と束が設定していた数値より大幅に低いので実験や改良の余地はあるだろう。

そして最後は無人ＩＳ実現に向けてのコアの無人運用向け調整だ。

こちらは文句無しで成功だ。現に『赤鉄』は操縦者を引き摺り出されながらもコアは正常に機能してバッタ男と戦い続けている。

現状『赤鉄』はナノマシンを搭乗者の手足を補うように展開して行動しているが、将来的に制作予定の無人ＩＳの駆動部分までどうするかはまだ検討の余地がある。

（そうだ、こんな魂が無い力なんか本物の強さじゃない…あの人の…『先生』の強さは魂があってこそなんだ）

…篠ノ之束にはかつて『先生』と呼び慕っていた男がいた。

『先生』は幼き束に時に厳しく、時に優しく…父親のように自分に愛情を注ぎ、科学の面白さを、素晴らしさを、そして人間として、科学者としての心構えを教えてくれた。

そして束は久しぶりに再会を果たした『先生』が束を守る為に仮面を付けてヨロイなんたらとかいう怪人と戦い、見事勝利したのを見た。

だが『先生』は命を懸けて束を助け、束に自らと同じ過ちを繰り返さないように言い遺すと、爆発の中へと消えていった。

それ以来束は世界へ…『先生』だけが死に、ヨロイなんたらの仲間だけが生き残った理不尽な世界へと怒りを燃やし、その復讐をすべく動いていた。

同時に最愛の妹・箒には自分と同じ苦しみを味合わせぬ様に強く、優しく、それでいて『先生』のように死なない無敵のヒーローを創ろうと決意した。

今回の騒動は束にとってその目的を果たす為の単なる実験の一環に過ぎない…筈だった。

先程からズキリ、と胸が痛む。

痛みの原因はバッタ男だ。

束は見た目が違う筈のバッタ男から…先程から『赤鉄』の搭乗者を庇う為に自らの身を盾にして攻撃を防ぎ続けているバッタ男から『先生』と同じ何かを…魂を感じ取ってしまった。

それに束が昔押し殺した筈の心の一部が反応する。

（違う！あれは先生なんかじゃない！先生は死んだんだ！それに私は悪い子なんだ！先生の言う事を聞かない悪い子なんだ！だからこんなの何でもない！何でもないんだ！）

そしてそれをまた押し殺そうと束は頭を振って必死に自分に言い聞かせる。

流れている映像の中では、バッタ男が血反吐を吐いていた。

「がはっ！？」

『赤鉄』のボディーブローを受けて仮面ライダー2号のクラッシャ

ーから血飛沫が飛び散る。

先程から腰が抜けて動けない真耶を庇うべく仮面ライダー2号は『赤鉄』の攻撃を回避せずにひたすら防御していた。

だが変身前のダメージや、真耶を助けるべくした無茶がたたり、仮面ライダー2号の動きは鈍り始めていた。

実際仮面ライダー2号は至るところから血を流し、クラッシャー部分には吐き出した血がこびり付いている。

しかし仮面ライダー2号はいつもの調子を崩さない。

「腰が入ってねえぜ…お前のパンチはよ…！」

そしてお返しとばかりに思い切り殴り飛ばすと追撃に移る。

しかし『赤鉄』は鞭で仮面ライダー2号の首を絞めるとスラスターを噴かして飛び上がり仮面ライダー2号を地面に引き摺り、壁へと何度も叩き付ける。

そして仮面ライダー2号が何とか鞭を引きちぎるとチャクラムを投げ付け、そのまま柳葉刀で切り掛かる。

その一連の流れを、大島とリッベントロップは自分達以外退避が完了した管制塔で眺めていた。

ＩＳ部隊はシールドエネルギーの殆どを消耗し武装を全て失っていた為に全員退避させた。

そこに二人の女性が入ってくる。

「失礼します！」

「あの、そこにあるマイク貸して頂けませんか！？」

織斑千冬と白鳥玲子だ。一文字隼人が変身した後二人は一部が崩れて通れなくなった道を迂回しながらどうにかして管制塔へとやって来た。

玲子の必死の頼みに思わず頷く大島。

すると玲子はマイクを取りアリーナにいる真耶に向かって話し始める。

「真耶さん！立って！そして隼人さんを…仮面ライダーを応援してあげて！隼人さんは…仮面ライダーは貴女の為に戦ってるの！だから…だから貴女の応援があればあんなヤツなんか一発で倒せるわ！だから仮面ライダーの…隼人さんの為にも立って！真耶さん！！」

「仮面…ライダー…」

―死なせるものか！

ふと千冬の脳裏にかつて『白騎士』のテストの為に滞在した月面基地で出会った男がよぎる。

その男は千冬が大気圏で燃え尽きようとしていた時に自らの身も顧みずに飛び込んできた。

―守るとも！君のお姉さんはこの俺―仮面ライダースーパー1が絶対に守ってみせる！

―ああ！約束だ！君の所に着くまで必ず護り抜く！

そしてその男…仮面ライダースーパー1は弟の一夏との約束を守り私を護り抜いた。

一文字隼人も同じ…沖一也と同じ『仮面ライダー』なら…

千冬は意を決してマイクを手に取る。

「山田真耶！まだ諦めては駄目だ！君には家族や友人が…それに私のように君が無事に帰ってくるのを待っている者がいるんだ！それと彼を…一文字隼人を信じてやってくれ！彼は人類の自由と平和を…そして君を絶対に守ってくれる仮面ライダーなんだ！」

「千冬さん…仮面ライダーを知ってたの？」

千冬は黙って頷く。そして真耶への呼び掛けを続ける。

「だから必ず生きて帰れる！君には仮面ライダーが…君の為ならどんな困難でも打ち払う君の味方…仮面ライダーが付いているんだ！だから絶対に諦めるな！後はほんの少し勇気を出すんだ！」

「もし君が自分自身や一文字隼人を信じられないのなら一文字隼人を…仮面ライダーを信じる私を信じてくれ！仮面ライダーが君を守ってくれる事だけは私が保証する！だから立て！立つんだ！山田真

耶！！」

それだけ言うと千冬はマイクが切れる。電源が落ちたらしい。

（一文字さん…彼女を…頼みます）

千冬は隼人…仮面ライダー2号に密かに祈っていた。

（玲子さん…千冬さん…）

真耶は二人の声を聞き何とか立ち上がる。

怖い。怖くてたまらない。でも自分の為に戦ってくれている隼人さんや応援してくれる千冬さんや玲子さん、待っていてくれている皆の為にも黙って見ていられなかった。

仮面ライダー2号は『赤鉄』の猛攻を辛うじて凌いではいるが、ダメージが大きいのか反撃すら出来ない。

（せめて一文字さんの為に…隙を作れれば）

そう考える真耶だが、生憎手持ちには石ころ一つない。暫く考え込

んでいた真耶だが、そこに大島の声がスピーカーから響く。

『山田真耶、もし君が今戦っている彼の力になりたいのなら、一つ言葉を送ろう』

『「戦場において敵の残置した火器は、我に有効な武器である事を忘れるな」…私の教官の言葉だ。どう取るかは君の好きにしたまえ』

真耶は暫し意味を理解出来なかったが、付近に残置された敵の火器…ドイツ軍のＩＳが取り落としたと思われるＩＳ用ハンドガンの存在に気付くと意味を悟る。

アサルトライフルは無理だがハンドガン程度なら生身の私でもまだ扱える。威力は低いが、注意を逸らせれば十分だ。

意を決して真耶はハンドガンを拾う。そして『赤鉄』に向けて発砲すると、銃弾は『赤鉄』に命中する。

『赤鉄』は真耶に斧を向けるがその瞬間に仮面ライダー２号に蹴り飛ばされる。

そして仮面ライダー２号と、真耶の目が合う。そして真耶は仮面ライダー２号に…隼人に向かって本心からの笑顔て言う。

「…頑張って下さい！隼人さん！私隼人さんを…仮面ライダーを信じてますから！」

昔から痩せ我慢ってのは得意だった。

仮面ライダー2号は攻撃を受け続けながらも反撃の機会を伺っていたが、蓄積されたダメージのせいで身体の動きが鈍っていると自覚していた。

（我ながら痩せ我慢のし過ぎか…無茶をし過ぎたツケだな）

今は防御に手一杯だ。だがまだ倒れねえ。こう見えて痩せ我慢は得意なんだ。真耶ちゃんが逃げるまでは…

そんな事を考えていると『赤鉄』が銃撃され、動きが止まる。その隙に蹴り飛ばす。

真耶と目が合う。そして

「…頑張って下さい！隼人さん！私隼人さんを…仮面ライダーを信じてますから！」

―身体中に力が漲ってくる。

―これは痩せ我慢なんかじゃない。俺は―俺達はこうやって応援されてきたからこそ、何度でも立ち上がってこれたんだ。

―ましてや彼女の―山田真耶の『最高』の笑顔って極上のオマケ付

きだ。

―だったら―だったら―

「だったら―頑張るしかないよな！」

「ライダーパワー！！」

そして仮面ライダー2号が変身した時と同じように両腕を曲げ左腕を垂直に、右腕を水平にして身体の左側で構えるとベルトの風車が回り、仮面ライダー2号の身体にパワーが満ち溢れる。

「行くぞ！！」

そしてそれ迄のダメージなど無かったかのように『赤鉄』へと殴りかかる。

『赤鉄』は槍を構えて突きにくるが仮面ライダー2号は拳で槍を迎撃する。そして一撃で槍をへし折るとそのまま拳の連打を加える。

『赤鉄』はそこで武器を鞭へと変えて仮面ライダー2号を打ち据えようとするが、

「ライダーチョップ！」

仮面ライダー2号の渾身の手刀により鞭とチャクラムを纏めて切り

飛ばされる。

ならばと手甲を形成して殴り掛かるが、仮面ライダー2号はパンチを受け止め『手四つ』で『赤鉄』と組み合う。

「どうした？それで終わりか？」

そのまま仮面ライダー2号は『赤鉄』を押し込み体勢を崩すとそのまま突き蹴りの連携を叩き込み、武器の生成すら許さず攻め立てる。

やがてどう足掻いても不利と判断したのか『赤鉄』は仮面ライダー2号に背を向け逃げようとスラスターを噴かして上へ飛ぶ。

しかし仮面ライダー2号はジャンプで飛び上がると後ろから『赤鉄』に追い付き、抱える。

「何処に行こうってんだ？鉄屑野郎」

そして竜巻の如く『赤鉄』諸共高速できりもみ回転を始める。

「ライダーきりもみシュート！」

遠心力が十分付いた所で下へと勢い良く投げ飛ばし、地面に思い切り叩きつける。

地面に叩きつけられた『赤鉄』は背部スラスターを破壊されるが、まだ立ち上がる。

そして『雪片』を形成すると、大上段に構える。シンプル故に強力な一撃を放つのだろう。

「いいぜ…その勝負、乗った！」

そして仮面ライダー2号もシンプル故に強力な一撃を…多くの悪を倒してきた必殺の一撃を放つべく飛び上がる。

『赤鉄』が『雪片』を構え、突進し、仮面ライダー2号へ斬撃を放つ。

仮面ライダー2号はそれに合わせるように宙返りをした後に『赤鉄』へ向けて渾身の蹴撃を放つ。

「ライダァァァキィィィィック！！」

仮面ライダー2号の力が、技術が、経験が、正義が、信念が、誇りが魂が込められた…そして山田真耶という少女の声援と笑顔を受け取ったその『最高』の蹴りは、斬撃を刀諸共押し返し、不可視の壁を突き破り鉄人形の五体を粉砕するには充分過ぎる威力を持っていた。

夕暮れのアリーナの中で、一文字隼人と山田真耶は立っていた。

「あの…一文字さん…本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫さ、これでも頑丈なんでね」

心配そうに顔を覗き込む真耶に隼人は苦笑をする。

とはいえ全身ボロボロの隼人を見て心配しない人間はいないだろうが。

そこに白鳥玲子と織斑千冬が歩いてくる。

「玲子ちゃん、お疲れ様」

「それはこっちの台詞よ、隼人さん…はい、カメラ」

隼人は玲子からカメラを受け取る。

「あ、あの…千冬さん…」

「…よく頑張ったな。君の様な後輩に会えて、本当に良かった」

「…千冬さん…私…私…」

感極まって泣き出す真耶に隼人は苦笑して嗜める。

「ほら真耶ちゃん笑顔笑顔！隣にいる弟独占を企む姉の組織『おとう党』大幹部で日本支部長『千冬姉』も困ってるんだし」

「…もう少し血を抜いた方が良さそうですね、一文字さん」

「おっ、遂にブラコン怪人『ブリュンヒルデ』としての正体を…痛てて！怪我人なんだから少しは気を使えよ！」

相変わらずの口調で千冬をからかい、ツッコミを入れられる隼人を見て真耶はクスリと笑う。

カメラのシャッターを切る音が鳴る。

隼人がカメラを構えて真耶の笑顔を撮影していた。

「ありがとう、真耶ちゃん。俺を信じてくれて。そして俺に最高の笑顔を、最高の一枚を、そして最高の声援をくれて…本当に、ありがとう」

そして隼人も礼を述べると真耶に笑いかける。

その笑顔は人懐っこくて、どこか優しげな『最高』の笑顔だと、真耶は思った。

「…ですから、織斑一夏への密着取材など許可出来ません」

「いや、そこを何とか…」

「駄目なものは駄目です。規則ですから」

それから数年後、ＩＳ学園職員室にある応接間で１人の教師と１人のカメラマンが押し問答を繰り広げていた。

教師の名前は織斑千冬。カメラマンの方は一文字隼人だ。

隼人は世界初の男性ＩＳ操縦者『織斑一夏』を取材する為に来たのだが、その素顔を撮りたいが為に密着取材させてほしいと申し込んだ。

しかし千冬はそれを拒否する。規則で認められないというのもあるが、最大の理由は

（こんな人を一夏に近付けたら、絶対に悪影響を受ける）

という判断からだ。

この男、千冬のよく知るいい加減なインターポール捜査官に輪をかけていい加減というかフリーダムだ。

しかもタチの悪い事にその根底には一夏が前に話していた『本郷猛』にも劣らぬ熱い正義の心と気高い魂を秘めているのだ。一夏が影響されてしまってもおかしくない。

「どうせ弟に悪影響だからとか考えてるクセに…」

「何で分かるんです？」

「そりゃ顔に書いてあるからさ」

「…とにかく取材は許可出来ません。お帰りはあちらからです」

ムスっとして千冬は隼人に出口を示す。

「へいへいご協力ありがとうございました…」

「待って下さい…山田先生、一文字隼人さんを玄関までご案内して貰えませんか？」

「はい、分かりました」

そして千冬は副担任の山田真耶に隼人を送っていくように頼むと、立ち上がり応接間を後にした。

「しかし驚いたよ…真耶ちゃんが教師になるなんてね」

「少しでも私の経験が役立てられたら、って思いましたから」

ＩＳ学園内の廊下を歩きながら一文字隼人と山田真耶は話していた。

真耶はあの一件以降、だいぶ明るくなり、自分に自信を持てるようになると同時に、自分のように適性が低く、自分に自信が持てずに苦しんだ生徒達の力になれればと思い、ＩＳ学園教師を志した。

ドジで天然な所は教師になっても相変わらずだが。

「一文字さんはこれからどうなさるんですか？」

「フランスまで行って織斑一夏の元ルームメイトを取材に、ね」

隼人はそう言って事もなげに笑う。

その件の元ルームメイト…世界で２番目の男性ＩＳ操縦者『シャル

ル・デュノア』は、現在実は女性と発覚してフランスへと帰国している。

その事情に隼人は興味はない。ただ織斑一夏の素顔について聞くために取材しに行くだけである。

「…ま、互いにこれまでも色々とあったし、これからも色々あるだろうけど…頑張ってくれよ？君なら…あの時俺を助けてくれた君なら大丈夫だろうけどね」

そして隼人は真耶に笑いかける。

「ありがとうございます一文字さん…私も、頑張りますね」

そして真耶も隼人に笑い返す。

二人はそのまま並んで名残惜しむようにゆっくりと、しかし確実に玄関に…それぞれの道へと向かって歩き出していった。

（後書き）

拙作を最後までお読み頂きありがとうございます。

両原作への冒涜とはとっくに承知しておりますが疾走する本能のままにまたも書き上げてしまいました。

このような組み合わせが思いついた理由は、一文字隼人と山田真耶の両名で真っ先に思い浮かんだキーワードがどちらも『笑顔』であった事と、それでいて二人の笑顔はどこか対照的と感じた為です。

とはいえ最早こじつける気すらないので何となくとお考え頂いて結構です。

では拙作を読んで頂いた事に感謝申し上げながら後書きとさせていただきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1108z/

最高の笑顔、最高の一枚

2011年12月4日02時50分発行